

# 英文学に現れた19世紀の女性たち：女の本音（娘・妻）

大野佳代子・長谷部和子

## はじめに

女が男と同じように何でもやる事が出来て人生を楽しむ事の出来た時代は中世という時代が最後であったと、Mary R. MahlとHelene Koonは*The Female Spectator*の序文で言っている<sup>(1)</sup>。女が社会という公的な場から閉め出されなかったのは、度重なる十字軍遠征により、男のやる仕事を何でもこなさなければならなかったからだ。初期のクラフト・ギルドは必ずしも男性に限られてはいなかったという。しかし15世紀以降徐々に男と女の役割分担が明確になっていき、女性は女であるという唯それだけの理由により公の職業に就くことは容認されず、社会進出を阻まれるようになった。19世紀に入って女性の人権を求める運動はますます盛んになったが、条件付きで初めて参政権が女性に認められたのは、1918年のことであった。国の総力を挙げて参戦することになった第一次世界大戦がその動因であった。先の十字軍遠征時と同様、女たちはこの大戦中、男と同等に働く必要に迫られたからである。大規模なそして長く続く戦争によって、渴望された女性の社会的地位の向上が比較的あっさりと実現したとは、皮肉なことである。

19世紀の30～40年代は、社会体制がヴィクトリア朝のそれへと移り変わる重要な転換期であり、新しい社会・文化・女性の動きを理解するためには、見過ごす事の出来ない時代である。この転換期に生きた女性たちは日々の生活の中で、何を思いどのように暮らしていたのだろうか。本稿では、19世紀前半を舞台にして書かれた小説を通して、彼女たちの実像を追究することが目的である。当時の女性は未亡人になってからが最も幸せだったという<sup>(2)</sup>。女は未亡人になってからしか、自分の財産と自由になる時間とが得られず、自分の望み通りの生き方が出来ないというわけだ。しかし果たして本当にそうだったのだろうか。父親・兄弟・夫・周囲の男など、彼女たちを取り巻く様々な人間関係の中に浮かび上がってくる、当時の女性の本音に迫りたい。

### I) *Middlemarch*の時代背景

*Middlemarch*は1871年から72年にかけて発表されたが、小説の時代背景となっているのは1829年9月末から1832年5月までである。*A Study of Provincial Life*（『地方生活の研究』）という副題をもつこの小説では、第一次選挙法改正が成立する直前の数年間を舞台にした、イギリス中部の一地方都市の社会全体が描かれている。この19世紀初めの30年あまりという時代は、1793年に始まったナポレオン戦争が一大事件であり、特に1815年の戦争終結後は深刻な経済不況に見舞われ、それとともに社会の各層で人権を求める声が高まって行く。新興のブルジョワ階級は、32年の第一次選挙法改正を皮切りに着々とその勢力を拡大していったが、一方この不況下でイギリスの各地で労働者階級による人権を求める運動（チャーティスト運動）も広がっていった。1840～50年頃をピークに展開をし続けた

この運動には多数の女性の参加も見られ、殊に中流階級の独身女性が女性の地位向上のために熱心に活動したという<sup>(3)</sup>。

上流階級の子女の場合、結婚後もそれまでの生活水準を維持していくことが困難であるという理由で、生涯独身で通す者が18世紀を通じて非常に多く<sup>(4)</sup>、この傾向は19世紀に入っても続いた。当然その影響は聖職者を含む上層中流階級にも及んだことであろう。当時の社会通念では求婚できるのは男性側のみであり、女性はあくまでも自分に言い寄ってきた男たちの中から取捨選択することが出来るだけであった。このため、1773年の『レディーズ・マガジン』は結婚したがる男たちについて次のような不満を述べている。“the men marry with reluctance, sometimes very late, and a great many are never married at all”<sup>(5)</sup>結婚に至るプロセスの中で、求婚行動のイニシアチブが男性にしか許されていないということは、女性にとって何と不幸なことであつたらう。男性は就職し、何らかの収入を得ることが出来たから、結婚しなくとも生活に困るということはなかったであろうが、女性はそうはいかない。上・中流階級の場合、女は働いて収入を得ることが社会的に認められていなかったのであるから、結婚出来るか出来ないかは、当の女性にとっていわば死活問題になることもあり得たわけである。女性の地位向上を求める運動に、中流階級の独身の女性が殊に熱心だったというのは大いに頷けることである。

また、運良く求婚されたにも拘わらず、結婚したくても諸々の事情で結婚できなかった女も大勢いたことであろう。E.ギャスケルが1853年に発表した*Cranford*に出てくるミス・ジェンキンズの妹、ミス・マティがそれである。彼女は若い頃好きな男性がいて、幸い彼から求婚されたのであるが、彼の身分が下であるという理由で家族特に姉の強い反対に合い、結局生涯独身のまま年老いていく。牧師であった父親の死後わずかな遺産で、同じく未婚の姉と二人暮らしを続けるが、中流階級としてのプライドを頑なに保とうとする姉は、彼女にとって父親に代わる絶対的な支配者的存在であった。やがてその姉も死に独りぼっちになったある日、彼女は30～40年ぶりに昔の恋人と再会するが、思いがけないことに、恋人はあっけなく急死してしまう。失意の彼女はこの時初めて、長い間誰にも語らなかった本音をもらす。結婚に関して大それた望みなど全く持たず、家事のやりくりは上手く、小さな子供はいつも大好きであった彼女は、本当は結婚というものを一度はしてみたかったと言う。(C., p.197) 彼女がずっと年下の親友に打ち明ける次のような告白は、中流階級の体面のために好きな男性との結婚が叶わず、遂に生涯独身で終わらざるを得なかった、19世紀前半の大人しく心優しい一女性の真情が溢れ、哀れで読者の胸を打つものである。

I dream sometimes that I have a little child--always the same--a little girl of about two years old; she never grows older, though I have dreamt about her for many years... Only last night ...my little darling came in my dream, and put her mouth to be kissed, just as I have seen real babies do to real mothers before going to bed. (C., pp.198-9)

工業化が進むにつれてイギリスの各地で鉄道の敷設事業が押し進められたが、これは読書人口の増加に大いに寄与したようである。1725年に初めてバースにお目見えした巡回図書館は、1739年にロンドンに誕生した後、1780年代までにはイギリスのあらゆる市の立つ町に見られるようになった<sup>(6)</sup>。これにより、読書を楽しむという余暇の過ごし方は既に18世紀の中頃から人々に享受され始めていたが、鉄道はこの読書人口を飛躍的に増大させたのである。1725年にエディンバラに初めて誕生した貸本屋は、その後ロンドンや有名な保養地など人の多く集まる所で次々にその数を増やしていったが、19世紀に入ると各地に急速に敷設された鉄道を利用した貸本業者が現れ、地方の読者にも大いに貸本の利用が簡便になったからである<sup>(7)</sup>。それとともに人々の読書対象も変わっていった。ジョンソン博士に代表される重厚な文学から、手軽で気楽に楽しめる小説へという変化である。

*Cranford*には、このような時代の移り変わりがミス・ジェンキンズの死によって象徴的に描かれて

いる。ディケンズの *Pickwick Papers* を絶賛するブラウン大尉にひどく憤慨したミス・ジェンキンは、女中に命じてジョンソン博士の書物を書斎から持ってこさせる。それはいかにも重くどっしりとしている。彼女に言わせれば、分冊で刊行されるような薄っぺらな流行の小説など、読書の対象として値しないのだ。父親が牧師であった彼女には中流階級の間人としての強い誇りがあり、“the clear knowledge of the strict code of gentility” (C., p.116) を持っていた。世の中の物事はすべてそれなりのしきたり通りに進めていかねばならないというのが、彼女の信念である。妹のミス・マティに限らず Cranford の町の女たちは皆、彼女を精神的な拠り所にしており、事が起こるたびにどのような行動を取ればよいか、彼女に伺いを立てるとというのが殆ど習慣になっていた。しかし、ミス・ジェンキンの死とともに、彼女が固く守り続けてきた古いしきたり・価値観はもはや歓迎されないものとなり、一つの時代が確実に終わる。彼女の死後部屋のテーブルの上に堂々と置かれた読みかけのディケンズの小説 (C., p.41) が、そのことを物語る。Cranford の舞台は、当時 (1840 年頃) すさまじい勢いで膨張し続けていた工業都市マンチェスターから鉄道で 20 マイルほど離れた所に位置する、まだ辛うじて工業化の波を被っていない、穏やかな純朴な田舎町である。その田舎町でも人々の意識・価値観は徐々に変わりつつあった。

## II) 膨らむ中流階級と理想の妻像

産業革命はイギリス社会にさまざまな変革をもたらしたが、ブルジョワ階級が興り、中流階級に属する人々の職種が大きく広がったのもその一つであろう。G. Kitson Clark の定義によればイギリスの中流階級とは「収入或いは社会的な評価の点で、いつ如何なる時でも、貴族及び地主階級の人々と週給或いは日給で働く肉体労働者との中間に位置する、あらゆる人々」<sup>(6)</sup> であるという。Middlemarch にはこの中流階級の人々が実に多く登場する。まさに副題が示す通り、この小説には一地方の社会全体があますところなく描かれており、特に中流階級の職種の多さには圧倒されるほどである。聖職者、法律家、医師は勿論のこと、工場経営者、銀行家、個人商店主、競売人、職人、などなど。個人商店主については、靴屋、洗濯屋、金物屋、運送屋、製革業、絹織物屋・反物屋など、実にさまざまな商売人が登場し、医者には内科医、産科医といった専門医のほかには外科医兼薬剤師、全科診療の一般医など多数が登場する。金儲けに徹したベテランの医者もいれば、生意気盛りの使命感と理想に燃えた新米の医者もいる。

作中でエリオットは作者という立場で次のように発言している。“I at least have so much to do in unravelling certain human lots, and seeing how they were woven and interwoven, that all the light I can command must be concentrated on this particular web,…” (M., p.145) 彼女が描こうとしたのは、「この特殊な織物」と表現した人の世の有りようそのものなのであろう。新興中流階級だけでなく労働者階級や女性をも含めた人権への関心の高まり、これに押し切られた形で逐次行われる議会制度の改革、また全国各地に急進展する鉄道敷設等々、世の中が大きく変わっていく中で、地方の人々の暮らしもまたゆっくりとその姿を変えて行く。その変わっていく様を描き出そうというのが、作者の意図するところである。

中世以来厳然と且つ連綿と続いてきた、上流階級とそれ以下とを隔てる分厚い階級間の壁にひびを入れたのは、産業革命の進展とともに台頭してきた富裕な中流階級であった。ひびが少しずつ大きくなっていった 19 世紀の一時期に、この破れ目の進み具合がどれほどのものかを最も端的に示しているのは、ドロシアが初めてロザモンドと対面する場面の“there was a sort of contrast not infrequent in country life when the habits of the different ranks were less blent than now” (M., p.456) という記述である。身分の異なる二人の女性の対照的な佇まい (= 衣装・髪型・物腰など) について語られるこの場面での、「現在ほど階級間の隔たりがとれていなかった時代」という表現は、小説執筆時

から溯った30～40年ほどの間に人々の階級意識が大きく変化し、上流階級とブルジョア階級との間の壁が、薄く脆くなったことを示すものである。

産業革命は労働者階級の女性を苛酷な労働条件と悲惨な生活環境とにより苦境に陥れたが、一方で中流階級の女性には怠惰で贅沢な生活をもたらした。19世紀初めの、農業主体から工業化へという加速度的な社会の変化は、女性に多くの雇用機会を提供したが、そのような肉体労働に従事したのは下層階級の女性だけであった。中流階級は富と豊かさを具現する階級としてみますます台頭して行くのであるが、富と実力を手中に納めた彼らのさしあたっての最大関心事は、自分たちよりも下位の階級とは絶対的な距離を保ちつつ、ありとあらゆる手段を用いて少しでも上流に近づくことであった。そのために男たちは自分の妻や娘が、衣裳や振舞いの点で上流階級のそれに似ることを大いに奨励したし、女たち自身も喜んでそうした。Lynne Agressが言うように、中流階級の女性は完璧な妻から申し分のないレディになることが要求された<sup>(9)</sup>のである。*Middlemarch*にもそのような、なんとか自分も上流社会の人々の輪の中に加わりたいたい、一心に上方だけを見て生きる中流階級の姿が描かれる。

工業化社会の中で、生活スタイルが変わるとともに、女と男の役割分担は一層明確になった。殊にヴィクトリア朝では、女の理想像は「家庭の天使」<sup>(10)</sup>という言葉で象徴され、女は常に家庭の中において夫や子供のために尽くすべきだというのが、社会通念となった。

女性の教育はすべて、男性にかかわらせて考えられるべきである。男性に好かれ、男性の役に立ち、男性から愛され敬われ、幼い時は育て、大きくなれば配慮を尽くし、助言し、慰め、その生を快い甘美なものとする、それこそ、いついかなる時にも女性の義務であり、女性に子どもの時から教えるべきことなのである<sup>(11)</sup>。

ルソーが*Emile*で説いたこの女性観が、ヴィクトリア朝の女子教育の根底にもある。次に引用する、*Middlemarch*の主要人物の一人である医者のリドゲイトの理想の妻像もまさにそのようなものであった。

…who venerated his high musings and momentous labours and would never interfere with them; who would create order in the home and accounts with still magic, … who was instructed to the true womanly limit and not a hair's-breadth beyond - docile, therefore, and ready to carry out behests which came from beyond that limit. (*M.*, p.371)

女はその〈性〉により、社会的には常に男の劣位に置かれていた時代である。個人的にどんなに優れた才能を有していても、女は女であるというただそれだけの理由で、その才能を活かして就職することは出来なかったのである。女は教育によりたとえどれほど知識を得たとしても、あくまでもそれは「家庭の天使」として役立てるためであり、自己を高めるためである。それによって職を得るということはただ一つの例外を除いては絶無であった。その例外とは、教師である。この教師ですらも女の場合はどんなに有能であっても、結婚すれば無論のこと婚約した時点でもう既に辞めなくてはならなかったという<sup>(12)</sup>。*Middlemarch*の登場人物の一人、ガス夫人は結婚する前教師であった。当時、生計のためにどうしても働かなければならない中流階級の女性にとって、家庭教師は唯一世間の非難を浴びない職業であったのだが、ガス夫人はそれでも“a woman who had had to work for her bread” (*M.*, p.242) として、工場経営者の夫を持つヴィンシー夫人から見下される。彼女に言わせれば教師としての知識など、“something like a draper's discrimination of calico trademarks, or a courier's acquaintance with foreign countries” (*M.*, p.242) であって、そのようなものは裕福な家庭の女には全く必要がないのである。

### III) 「家庭の天使」の実像

当時は十分な財産を持った立派なジェントルマンと目出たく結婚することが、女性にとっての唯一の生きる目標であった。“Her whole future happiness depends on attracting and choosing the right man.”<sup>(13)</sup>であるからだ。三代続いた裕福な工場経営者の娘であるロザモンドもその一人である。次の引

用はロザモンドに関する描写である。

Only a few children in Middlemarch looked blond by the side of Rosamond, and the slim figure displayed by her riding-habit had delicate undulations. In fact, most men in Middlemarch, except her brothers, held that Miss Vincy was the best girl in the world, and some called her an angel. (*M.*, p.114)

優美で才能があり、淑やかで出しゃばらず、男に庇護してやらなければという気にさせ、美しい。まさに彼女こそ「家庭の天使」そのものである。リドゲイトは彼女を「申し分のない女性」だと考え結婚するのであるが、そのような外見とは裏腹に、彼女には非常にしたたかで、計算高いところがある。次に引用する例はそれらを表わすものである。

She was not a fiery young lady and had no sharp answers, but she meant to live as she pleased. (*M.*, p.312)

…it was not so very melancholy to be mistress of Lowick Manor with a husband likely to die soon. (*M.*, p.308)

彼女にとって結婚はまさに最重要課題であった。「正しい選択」をするに当たって、愛情などは二次であった。上昇志向の強い彼女が医者であるリドゲイトを選んだ理由は、彼が名門の出であり、彼と結婚すれば上流階級に仲間入り出来る可能性があるという、ただそれだけであった。このようなロザモンドと、「人生の装飾品であることが妻の第一の役目」(*M.*, p.95)と考えるリドゲイトとは、ある意味で似合いの夫婦と言えよう。いわば、どちらも一種の打算で結婚したのであるから。しかし、ロザモンドの方が一枚上手であった。結婚してからリドゲイトは何度も妻と諍いを起こすが、其の都度ロザモンドの無言の抵抗に合う。無抵抗の抵抗とでも呼ぶべきか。遂には彼は妻の要求に応えるために自分の理想を捨てる羽目になる。一見したところヴィクトリア朝の社会が求めた理想の女像にぴったりの彼女であるが、実際は男を自分の思うようにコントロールし、それによって自らの欲望を充たしていく女なのである。

一方ドロシアは上流階級の人間としての義務・使命感の強い女性である。支配階級の一員として、下層の人々の暮らしを少しでも良くするために、自分に出来ることは何かないかと、いつも自問自答している。現在19才である彼女は、両親が遺してくれた700ポンドの年収を、自分の計画の実行のために自由に使える日を待ち望みながら、ありきたりの慈善活動だけでは物足らず、小作人のために快適な住居の設計図作りに夢中になったりする、そんな女性である。しかしそもそもそのような理想を抱いていること自体が、彼女を美しいにも拘わらず周囲から敬遠される存在にしていた。次の引用はリドゲイトによるドロシア評である。

She did not look at things from the proper feminine angle. The society of such women was about as relaxing as going from your work to teach the second form, instead of reclining in a paradise with sweet laughs for bird-notes, and blue eyes for a heaven. (*M.*, p.95)

中年の独身男であるチチェリー氏の評は更に露骨なものとなる。

…not my style of woman: I like a woman who lays herself out a little more to please us. There should be a little filigree about a woman - something of the coquette. (*M.*, p.89)

自分の自由になる700ポンドの年収を持つドロシアは、ロザモンドに比べると一見はるかに自分を主張し、自分の思い通りに生きていくことが可能であるかのように見える。しかし彼女も、結婚し夫に自分を託すことによって、自分の夢を実現させたいと願う。この点ではロザモンドと同様である。が、ロザモンドとは異なり、彼女の願望には私利私欲的なところは全くない。彼女の心の根底にはいつだって、世の中のために自分に何が出来るか、自分は今何をすべきかということが、自分一人の幸福よりも優先して在るのである。夫の手足となって夫の仕事を手伝うことによって、自分も大きく世の中

の役に立つことが出来る——これが彼女の結婚の目的であった。

#### IV) 労働者階級の生活

1830年代から40年代という時代は、俗に「苛酷な30年代と飢餓の40年代」と呼ばれる一方で、歴史のうえでは選挙法改正、新救貧法の成立、穀物法廃止運動、国民憲章請願運動といった政治上の大きな動きが見られたために、「改革の時代」とも呼ばれている。<sup>(14)</sup> このような社会体制の中で生きる貧しい下層階級の人々をE.ギaskellは*Mary Barton*という小説の中で詳しく描写している。別名*A Tale of Manchester Life* (『マンチェスター物語』) と呼ばれ、マンチェスターがこの小説の舞台である。マンチェスターは産業革命発祥の地と言われ、その動きとして1786年に既に全英商工会議所が設立されているが、これほど「貧富の激しい都市は世界中に類がない」とも言われた。ギaskellによって描出された悲惨な生活ぶりは読む者の胸を打ち、これが発表された直後には、一小説としての扱いよりも社会小説としての評判が高かった。

主人公メアリーの父であるジョンの友人、ジョージ・ウィルソンは工場労働者、そしてその息子ジェムは機械工、メアリーの友人マーガレットの祖父ジョブ・リーも工場労働者というように、彼らはこの都市の産業には欠かせない人々である。勿論、労働者に対しての工場主カーソン一家の存在も忘れてはならない。これは「飢餓の40年代」というとてつもない不景気の時代に一方が病気の子どもに肉一片すら買ってやれないのに、他方は何人かの首を切れば今まで通り贅沢な生活が続けていけるという現実絶望感を持って生きる人々の物語である。<sup>(15)</sup> 次にジョンが友達ジョージに自分たちの生活と金持の生活との間にあるどうしようもない溝について話すくだりを引用してみよう。

We're their slaves as long as we can work; we pile up their fortunes with the sweat of our brows, and yet we are to live as separate as if we were two worlds; ay, as separate as Dives and Lazarus, with a great gulf betwixt us: but I know who was best off then, ... (MB., p.7)

この物語は1848年にギaskellの最初の小説として書かれていて、小説の題名がそのままヒロインの名前であり、物語は彼女の恋愛を巡って様々な人間模様を展開している。その中の5人の女性にスポットをあててみよう。

メアリーの父ジョンは貧しい織物工であり、彼女は幼くして母を亡くしている。そして、メアリー自身はミス・シモンズ(婦人帽子屋兼婦人服仕立て業者)の店の見習いお針娘である。父の失業という苦しい生活の中で母を亡くしたメアリーは生活のために働かなければならない。この女主人公のように労働者の娘がパンのために店員、女中、お針娘、というような仕事に従事したのは、まだましなほうで工場や炭坑の肉体労働者として、非人間的な環境と給料の下で酷使されていた例はいくらでもあったし、売春婦となる娘も多かった。事実メアリーの叔母であるエスターは売春婦である。

階級社会がはっきり際立ってくるのは1830年頃からであると言われているが<sup>(16)</sup>、特に産業資本家層より下の一般中流階級はこの時期に飛躍的に数が増え生活水準も上がったのである。彼ら中流階級の消費生活の平均衣料費は約12%で、年収100ポンドの家庭ではたった3%であるのに対して500ポンド前後の家庭では15%ほどを占めたことが分っている。労働者階級と比べたとき「清潔さ」は中流階級のシンボルでさえあったようである。すなわち、「格好よさ」で人の地位を評価し、「良い格好」を保つことは自分の地位を維持し続けることであったのである。事実、ヴィクトリア中期に衣類関係の仕事に従事している市民はロンドンではとても多かった。もともと、古着屋から始まったこの仕事は中流階級のニーズに従って徐々に増えていったようであった。ロンドンのウェストエンドのドレスメーカーに雇われた婦女子は一日12時間から17時間も働いて、賃金は熟練度に応じて一年25ポンドから一週6シリングにまで及んでいた<sup>(17)</sup>。このような劣悪な環境の中でも洗濯女やお針娘の需要は増えていったのである。この風潮はマンチェスターにも多大な影響を与えたと思われる。労働者の娘は、売春

婦にならない限り、どんな低い職業に就こうとも、世間から白い目で見られることはなかったのに、父のジョンはメアリーが工場で働くことに対してあまり賛成はしていなかった。女性にとっての限られた仕事からメアリーが選択する仕事についての描写がある。

Mary must do something. The factories being, as I said, out of the question, there were two things open — going out to service, and the dressmaker business; and against the first of these, Mary set herself with all the force of her strong will. (*MB.*, p.21)

また、裁縫師は仕事が非常にきつくて30歳の中頃までに10歳は老けて見える、と言われたものである。メアリーの友達であるマーガレットはこの裁縫師であり、目の病気にかかる。恐らく現在の白内障か緑内障に罹っていると思われる。徐々に見えなくなって最後には失明するのであるが、彼女はすばらしい声を持っているために、歌手としてデビューし生計をたてていく。そして物語の最後では、彼女はジェムの無実を証明したウィルという男性と幸せな結婚をするだろうという想定がなされている。

メアリーの叔母のエスターは母の妹にあたり、心やさしい女性である。自分が不幸な境遇に陥り、ジョンやメアリーにあまり好かれていないことを知っているのに、メアリーとジェムの間を取り持つような役割を果たすのである。食べるためとはいえ、彼女は一番世間から白い目で見られる売春婦に身を窶し生きていくのである。メアリーは金持ちになりたいために一度は工場主の息子のハリー・カーソンとの結婚を夢見た。しかし、エスターはメアリーと異なり純粋な愛情から自分とは違う階層の男との結婚の約束をしたのであった。結果的にはその男には捨てられ、売春婦へと転落の人生を歩むのである。

『E.ギャスケルの長編小説』の中で中村祥子氏は、この労働者の娘メアリーの心の動きをより鮮明にするために、作者は異なった階級に属する二人の女性の生き方を取り上げ、しかも充分対照的に描いてると述べている。工場経営者の妻、ミセス・カーソンとミセス・ウィルソンである。共に同じ年頃の自慢の息子を持ち息子同士がメアリーを恋人にしようと争う。カーソン家は郊外の静かな場所にある大きな邸宅である。元々ミセス・カーソンはメアリーと同じような生まれであったが、結婚した相手が工場経営者であるということで毎日の生活は労働者のそれとは打って変わってしまう<sup>(19)</sup>。彼女は毎日大勢の使用人に囲まれて何もする必要がないにもかかわらず、頭痛に悩まされ自分は病気だと信じ込んでいるタイプである。唯一の自慢の息子は労働争議のもつれからメアリーの父であるジョンに殺されてしまう。そしてこの悲しみだけで残りの人生を送らねばならない。一方ミセス・ウィルソンは労働者である夫に仕える平凡な主婦である。夫のジョージが結婚前に現在のミセス・カーソンと結婚するかもしれないのに自分を選んでくれたことをとても幸せだと考えている女性である。勇気と自信に満ち溢れた息子のジェムが、ハリー・カーソンが殺された後、犯人として疑われ逮捕された時に、一時的に絶望感に苛まれるが、心を強く持ちメアリーと協力して無罪を勝ち取る。

主人公メアリーが最初に憧れるのは勿論明朗でハンサムで金持ちのハリー・カーソンである。カーソン家に入れば景気の良い華やかな生活が送れ、決して貧困などに悩まされることなどないと彼女は信じる。しかし、メアリーは自分の腕一本で稼いでいく自信を持った織物工ジョンの娘である。「自分のパンは自分で稼げ」式の考えで支配者階級に反発心を持ちチャーティスト運動にのめり込んでいくジョンを父に持つメアリーが、真に自分を本当に愛してくれているのはジェムだと気付くのに時間はかからなかった。彼女は経済的裕福よりも人間的な生き方を選択したのである。

自分が本当に愛しているのはジェムだと悟ってからのメアリーの行動力にはただ驚くばかりである。ジェムの無実を証明するための真犯人を探すことは、自分の父を犯人として証明することになってしまう。そのためにジョブと相談し、ジェムが殺人現場にいなかったという不在証明のために、必死に証人としてのウィルを探し出すのである。既に、船で出航してしまっているウィルを小船で追いかけて裁判に連れてくる。そして自ら裁判の公判席に立ちハリー・カーソンが殺される前からジェムを愛し

ていると皆に告白する。

メアリー、マーガレット、エスター、ミセス・ウィルソン、そしてミセス・カーソンの生き方や考え方を比較してみるとミセス・カーソンを除いた4人は、この時代の女性達に多く見られる誰かに従属し、その庇護の下で生きようとしたり、世間一般の考え方にあえて甘んじようとする姿勢が全く感じられない。自分の考えを持ち、行動する女性なのである。メアリーは最後に裁判で無罪を勝ち取りジェムと共にカナダへ移住する。メアリーが真の女性の自立に目覚めて生きていく姿や、その他のメアリーの周辺で生活する女性は、自分の足で地を歩いて生きているなという感を読者に持たせる。これらの女性たちが次の時代に女性が社会進出をしていく足がかりを作っていくのである。

## むすび

以上、19世紀の20年代～40年代がどのような時代であったかを見てきたが、“once married, women became legal slaves”<sup>(20)</sup>と M.Springerが言うように、確かにこの時代は女は法的には存在しないも同然の、女にとって辛い時代であったかもしれない。しかし、ロザモンドが結婚後間もなくに発見したことは、“women, even after marriage, might make conquests and enslave men” (M., p.461) ということであった。つまりこの夫婦に於いては奴隷となったのは、実質的には夫の方であったのだ。うわべは理想的な「家庭の天使」を装いながら、その実自分の望んでいたものを彼女は、夫を媒体にして殆どすべて手に入れることが出来た。一方彼女の夫リドゲイトは、そのために自分が理想としていた医者としての生き方を断念せざるを得なかった。

この時代は、医学界は「暗黒の時代」(M., p.150)であり、改革の理想に燃えるリドゲイトのような若い医者にとって、特に病理学の分野はいわば「アメリカのようなものだ」(M., p.152)とエリオットは作中で解説している。しかし、「近頃は祈禱書に基づいて言ったことでも反対される」と、牧師の老いた母親が嘆き、それに対してリドゲイトが「自分の説を主張したい人にとっては楽しい時代なのだ」と応じる(M., p.176)ように、そのことは医学界に限らずあらゆる分野で言えたのではないか。人々の言動を呪縛していた階級意識も徐々にその厳しさが緩んできたことが、Cranfordにおいても女たちの行動からうかがえる。“the strict code of gentility” (M., p.116)の権化のようであったミス・ジェンキンズが死ぬと、中流階級の人間の持つべき厳しい規律は次第に意識の片隅に追いやられ、やがては気にも留められなくなってしまふ。「そんな窮屈なこと言っていたら、今に付き合うことの出来る人は一人もいなくなってしまうわ」(C., p.116)というわけだ。

同じことが労働者階級にも言える。出航してしまつた船を小船で追いかけて証人を連れ戻すという、メアリーの取つた行動に見られるバイタリティは、この時代が労働者階級の女性にとっても「アメリカのようなもの」を漂わせた時代であったことを示すものであろう。

つまり、これらの小説の背景となっている時代は、法的には別として、必ずしも女にとって抑圧された時代であったわけではないのではないかと。直接前面に立ってしたいことをするというわけにはいかなかったが、その代わりに夫の後ろに隠れていわば背面コントロールを、しようと思えば思いのままに出来た。ドロシアもロザモンドも結局は、それぞれの夫を通して自分の望みどおりの人生を送ることが出来たのである。上流階級・中流階級・労働者階級という三つの階級が確立したのは19世紀に入ってからであるが、一方で従来上流階級とそれ以下の階級を厳然と隔てていた壁は、ブルジョア階級が勢力を増大してきたこの頃から、薄く脆くなり、いわば梯子がかけられたように、以前に比べ容易に昇り下りが出来るようになった。男であろうと女であろうと、強い欲望・野心を持つ者にとっては、その達成が必ずしも不可能ではないと思わせる時代、19世紀はいわば無限の可能性を秘めた時代、であったと言えるのではないかと。



付記：テキストは、E. Gaskell, *Cranford* (London: Macmillan And Co., 1927), *Mary Barton* (New York: W. W. Norton & Company, c1958), G. Eliot, *Middlemarch* (London: Everyman's Library, c1991) を用いた。同書からの引用はそれぞれ *C.*, *MB.*, *M.*, と表記し、引用頁数を記した。

〔注〕

- (1) Mary R. Mahl and Helene Koon (eds.), *The Female Spectator* (New York: The Feminist Press, c1977), p.5.
- (2) *Ibid.*, p.9.
- (3) 古賀秀男『チャーティスト運動の構造』京都：ミネルヴァ書房、1994, pp.36-9.
- (4) L. ストーン、北本正章訳『家族・性・結婚の社会史——1500～1800年のイギリス』東京：勁草書房、1991, p.314.
- (5) Eva Figes, *Sex & Subterfuge: Women Writers to 1850* (London: The Macmillan Press, 1982), p.8.
- (6) *Ibid.*, p.9.
- (7) 清水一嘉「貸本屋と読者大衆」『英国文化の世紀 4 民衆の文化誌』（松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編）東京：研究社、1996, p.76.
- (8) G. Kiston Clark, *The Making of Victorian England*, p. 5. quoted in Lynne Agress, *The Feminine Irony: Women on Women in Early-Nineteenth-Century English Literature* (Granbury: Associated University Presses, 1978), p.32.
- (9) *Ibid.*, p.32.
- (10) 川本静子「清く正しく優しく——手引書の中の〈家庭の天使〉像」『英国文化の世紀 3 女王陛下の時代』（松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編）東京：研究社、1996, pp.54-5.
- (11) ルソー「エミール：第 5 編」『ルソー全集第 7 巻』（樋口謹一訳）東京：白水社、1982, p.169.
- (12) Lynne Agress, *The Feminine Irony*, p.69.
- (13) Eva Figes, *Sex & Subterfuge*, p.7.
- (14) 佐野晃「英国の状況小説—ギヤスケルとデイズレイリ」『英国文化の世紀 3 女王陛下の時代』、p.108.
- (15) 同上書、p.111.
- (16) 同上書、p.172.
- (17) L・C・B・シーマン、社本時子・三ツ星堅三訳『ヴィクトリア時代のロンドン—1837以後のロンドン概観』大阪、創元社、1987, p.9.
- (18) 同上書、p.10.
- (19) 中村祥子「社会小説考」『E・ギヤスケルの長編小説』東京：三友社、1991, p.13.
- (20) Marlene Springer, “Angels and Other Women in Victorian Literature,” *What Manner of Woman: Essays on English and American Life and Literature* ed. Marlene Springer (New York: New York University Press, 1977), p.128.

参考文献

1. 青山吉信・今井宏編『新版概説イギリス史：伝統的理解をこえて』東京：有斐閣、1991.
2. イヴォンヌ・クニビレール、カトリーヌ・フーケ、中嶋公子・宮本由美ほか訳『母親の社会史：中世から現代まで』東京：筑摩書房、1994.
3. 川本静子『G・エリオット：他者との絆を求めて』（英米文学作家論叢書）東京：冬樹社、1980.
4. 和知誠之助『ジョージ・エリオットの小説』東京：南雲堂、1966.
5. 海老池俊治『ヴィクトリア時代の小説——社会史的背景を考慮して——』東京：南雲堂、1958.
6. 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生：十八世紀とジェイン・オースティン』（MINERVA 英米文学ライブラリー ①）京都：ミネルヴァ書房、1995.